

# 園芸科と柳宗民先生

大谷 弘(元恵泉女学園短大園芸生活学科長)

柳先生が小平時代の園芸科で花き園芸を教えられたのは1960年の前半からであり、伊勢原移転後も含めると、約30年にわたって恵泉教育に関わってこられたのである。先生の講義は自ら花づくりをされている長い経験をもとに分かりやすく、しかも奥行き深いものであった。あの優しい童顔のような笑顔で語りかける話に学生たちは引き込まれて、一生懸命に勉強していたように思う。先生が短大に見えている時には、何時も学生たちに取り囲まれて楽しそうに話をされている姿を思い起こすのである。



先生のお宅は小平の泉蔵院というお寺の裏手にあり、そこで花づくりの傍ら花き園芸の普及、啓蒙のため、全国各地を回っておられた。わたくしは小平時代に学校の用事で何回か伺ったことがあるが(自転車で約20分)、お宅に着いて先ず対面するのは、可愛い猫を始めとする多くの小動物たちであった。これは先生が花を心から愛すると同時に、動物や鳥、虫などの生き物、また自然を大事にされたためである。

園芸科の学科創設記念日であるプレーデーの目玉の一つは、校舎前の芝生に設けられる「園芸相談」であった。これを毎年担当されたのは柳先生であったが、ご都合が悪い時にはNHKの「趣味の園芸」に出演されている江尻光一先生、平城好明先生などが応援して下さった。ところが1984年のプレーデーには、柳・江尻両先生が揃って担当されたのである。

この年は丁度、両先生のお嬢さんが在学中であったため、実現したのである。当日の来場者のなかには「あのNHKの趣味の園芸で有名なお二人の先生がどうして一緒に担当されたのですか。恵泉という学校は素晴らしいところですね」と言われたことを思い出す。

柳先生の最後の著書となった『日本の花』のエピローグ―四季を味わう悦び―のなかで、「自然との共存ということをよく云われるが、共存したければ、豊かな心をもって、生き物すべてみな兄弟という大らかな気持ちになることが必要ではないかと思う。」と書いておられる。人間のエゴが地球環境を破壊している現代にあって、このお考えを心に銘じて生活していきたいものである。